

① <循環形式の形成> ② <どの楽章なら、「シラーの詩」を迎い入れられるか？>

★続く3番目～6番目までのRec.は、最初の2つのRec.と見た目の形はほぼ同じだが、役割は全く異なる。これらについては、本編の8頁～11頁に詳しく説明してある故、先にそこを読まれることをお勧めする。以降は彼の目的；①循環形式の形成により、歌がメインになっても交響曲の形式を保つ。②シラーの詩をいずれかの楽章に上手く導入することを最終目的とし、どの楽章なら挿入が可能かを、各楽章ごとに付けられたRec.の言葉を使って試して(説明して)いく。以上を理解して下さったものとして、以下に、3番目のRec.(1楽章がテーマ)から話を進める。

1 楽章冒頭部を8小節演奏後

1 楽章冒頭部が始まると、違う！その音楽では「シラーの詩」の言わんとする内容を表現しにくい！
もっと喜びに繋がる快い音楽で(祝祭に相応しい歌と踊り？等)でなければ！

Tempo I Presto $\text{♩} = 66$

38 小節

f ff

ちがうー！これじゃなーいわたしがほしいーのはなにかべつーのころよいものなのだー
O nein! dieses nicht, etwas anderes (gefälliges) ist es, (was) ich fordere ●快いもの；平和で平等に繋がる祝祭の歌や踊り？

dim.

rit. poco Adagio

2 楽章冒頭部 8 小節演奏後

音楽的には素晴らしい楽章だが、「シラーの詩」はこの楽章(scherzo)が表現しているような、
軽々しい浮かれた音楽の中ではなく、もっと明るく美しいより良い音楽の中で迎えよう！

Tempo I (Presto) $\text{♩} = 66$

56 小節

f ダメだ たわむれーだも一つと明か るく うつくしく良きもの *dim.*を
Auch dieses nicht, (das ist) nur Possen, etwas heiter, etwas schönere und bessers
Auch dieses nicht, ist nicht besser, sondern nur etwas heiterer これもダメだ 良くなっていない 何かもっと朗らかなものを(ノッテボーム)

3 楽章冒頭部 2 小節演奏後

“美しい音楽は素晴らしいが、もう少し(世の中を改革する)活気ある音楽の方が、「シラーの詩」にはマッチする！”
新版3社は、自筆譜に準じ表示をTempo Iに戻した。しかし、初版はテンポをPrestoから遅くする意味でTempo I Allegroにしており、20世紀末までの版は初版に準じている。私は、初版作成時にベートーフェンの指示がありAllegroが加えられたのでは、と思っている。冒頭の数小節は、その方が音楽にマッチする故。

Tempo I Allegro

65 小節

p あーこれもちがう やさしーすぎだ もっと活気あるなにかをさがし もとーめん
Auch dieses (nicht), es ist zu zärt(lich), etwas (aufgewecktes?) muss man suchen

cresc. sf

4 楽章冒頭

4 小節演奏後

以下の連続した主張 Ich werde sehn dass ich selbst euch etwas vorsinge als-dann stimmt mir nach は、2種の文献(ノッテボーム版とダイタース版)共に、上記3楽章用のRec.の後半部(muss man suche)と、下記4楽章用のRec.の前半部(Ha! ...nun gefunden)までとの間に、それぞれ異なった載せ方で書かれている(11頁上段参照)。そしてそれらは、おそらく誤って上記3楽章に関する記載の後、再度3楽章用のRec.の一部として続けられてきた(11頁下から2行目の5線譜)。しかしその記載のされ方は不自然で理に合わず、かつ主張内容も明らかに4楽章の内容であり、それが誤って3楽章の一部として書かれていることは誤り以外考えられない。言い換えれば、それらは明らかに4楽章用後半部分の主張である。それ故、私は自信をもってそれらは、Br.のRec.の後半部分(Ha! Diese ist es Es ist nun gefunden)の後に用いられるべき主張であり、さらにその後半部 als-dann stimmt mir nach は、歌による【歓喜の歌】(241小節～)に繋げるために、ベートーフェンが敢えてその部分に“私に続いて唱和せよ”と書き記したものと確信している。すべてに辻褄が合うからである。

Allegro assai $\text{♩} = 80$

Tempo I

85 小節(チェロ・バス)からと 231 小節(Br. 独唱)からとは全く同じ旋律。前者は器楽による【歓喜の歌】に繋がり、後者はBr.と合唱による【歓喜の歌】に繋げるための呼びかけの言葉が続く

f あ！これ なり やつと見 つ けた よろ
Ha! Dieses ist es Es ist nun gefunden Freu-de

sf

85 小節)； こーびを (わ た しー がー みず かー らー う たい し めー さ ん)
(Ich werde sehn dass ich selbst euch vor-singe)
→チェロ・バスの【歓喜の歌】

231 小節)； こーびを (わ た し が みず かー ら う たい し め さー ん つづ い て う た え)
(Ich werde sehn dass ich selbst euch vorsinge als-dann stimmt mir nach)
→Br.と合唱の【歓喜の歌】

ベートーフンの書き残した、冒頭のレシタティーヴォ(以後 Rec. と記す)を準備するために試行錯誤し、書き直しを繰り返した資料には不鮮明かつ意味不明な箇所が多い。その不鮮明な資料の読み取りの関係で文献は2種あり(ノッテボーム版とダイタース版)、箇所によってはその違いの2種を併記した。以後の、各 Rec. に付けられた主張は、4楽章作曲前に彼が試行錯誤していたそれらの主張と旋律群を、4楽章冒頭から連なる、一連の連続するチェロ・バスの Rec. という形式の、一つのストーリー(彼の主張群)に纏め上げたものである。ベートーフンは最終的にこの交響曲を、シラーの詩による独唱者達と合唱による大規模な形式にする大英断を下した際、それらチェロ・バスの言葉のエキスを、後にバリトン(Br.)の Rec. により直接言葉で主張させ、その主張が成就した暁に、満ち溢れた歓喜と共に、“シラーの詩”の世界に足を踏み入れることが出来るとした。その際、冒頭のチェロとバスの Rec. の旋律にも大幅にメスを入れたため、下記の決定譜(最終印刷譜)と翻訳は、当初の旋律とそこに付けられた言葉(主張)を参考に、印刷譜に当初の言葉(主張)を私が当てはめたものである。新しい旋律は勿論ベートーフィン自身の作曲であり、そこに付けられた言葉も、元々その原曲に彼の付けた言葉である故、これらを知らずして、強烈に速いテンポ指示の意味や、その後の Rec. の重要な意図を理解することは不可能であろう。

Presto $\text{♩} = 66$ **怒りと絶望による猛烈に速い緊迫のレシタティーヴォ!** 日本語意訳は内藤彰による

① 9小節 arco

ダメだー! この音は我れ我れにーぜつぼうをおもい—出させる

Nein diese (Töne) (würde uns) erinnern an unsre Verzweiflung (voll) stand.

●“この音”; 冒頭(8小節間)の、(絶望の)ファンファーレのこと(後にバリトンの Rec. により diese Töne と歌われる)

- ① ベートーフンは「第九」の作曲当時、フランス革命で失脚したはずの特権階級層の復権、そしてそれに伴う自由の剥奪や、歌詞や文献に対する厳しい検閲。近隣諸国で頻発する数々の戦争等、彼が絶望的と感じた当時の政治の流れを、4楽章冒頭の、敢えて憎々しく汚い音で書かれた(ベートーフィン談)ファンファーレ(Fan.)の音に例え、憎々しく“この音”と称し、次(9小節~)からのチェロ・バスの Rec. に“絶望”の言葉まで用い(上記楽譜)、怒りを持って極めて速いテンポで演奏させることにより、上記 Fan. (絶望的政治の流れ)を強烈に破壊、拒絶した! (ベートーフィン自身が $\text{♩} = 66$ という極めて速いテンポを楽譜に指定し、そのテンポを絶対を守るようにとの注意書きを、総譜出版の際仏語で書き加えた) なお、“絶望を思い起こさせる”とは、“フランス革命直前の自由が極端に制限された、不平等な階級制度だった頃を思い起こさせる”との説あり。

“この音”は、後にバリトンの Rec. が初めて登場する “O Freunde nicht diese Töne” のことである。直前の(絶望の)ファンファーレの再現(209小節~後、チェロ・バスとほぼ同じ形の Br. の Rec. に、今度は初めて上記言葉による主張を与え、“お〜友よ! こんな(絶望的政治の横行する)音(世の中(比喩))は(まっぴらだ)”と、チェロ・バスと同じく、絶望的政治の流れを、比喩によるドイツ語で厳しく拒絶している。

彼は、このバリトン独唱で命令調に歌われる厳しいメッセージに、強烈な印象を与えるためか、当初、年月をかけて周到に用意してきた、4楽章冒頭部のチェロ・バスに付けられていた上記主張は、後の主部で歌われる (Br.) の Rec. に任せる形で、最終的にすべて削除し、オーケストラ演奏だけでその主張を物語る、当時流行りの器楽 Rec. (レシタティーヴォ)形式により主張を展開することにした。

当然 Br. の Rec. も、絶望的政治の流れを強烈に拒絶するため、極めて速く厳しいテンポ $\text{♩} = 66$ ままの Rec. で歌うよう意図されている。

今まで、総譜の誤植もあり(第2章②)、この事実を見過ごしていた(知らなかった)多くの独唱者によって、この Br. の Rec. は、本来の絶望(拒絶)! の意味とは全く無縁のゆったりとしたテンポで、美声をひけらかすように朗々と歌われ、ベートーフンの意図は初演以来200年破壊され続けてきた(Br. 独唱者本人も知らないまま)。

- ② せっかくのフランス革命勝利(1799年)も、その後の上記古い特権階級の復権や、自由の剥奪、相変わらずの数多い戦争等、当時彼を苛立たせていた多くの政治的事象 ⇒ この音(絶望を思い起こさせる汚い音) ⇒ 強烈な速さと叫びによりそれらを完全粉碎! ⇒ 少しでもテンポが遅くなれば、この叫びの効力は減ずる(逆にこの叫びの効力が強ければ強いほど、それを強烈に拒絶することにより到達し得る歓喜は爆発的となる)! ⇒ 故に絶対に遅くするな (彼はこのように奏者に命じ、総譜にも敢えて注意書きした)!!

Presto

次に全く同じ2回目のファンファーレ(Fan.)で 絶望の世 を再現し、それを拒絶した後、

“今日は祝祭日(革命日)だ。歌い踊り自由への解放を祝おう!”

Presto $\text{♩} = 66$

24小節

② f (拒絶!)

友(も)よ 今日 は 祝(く) 祭(い)日(う)たい おどり いわー おう

Heute ist ein feierlicher Tag. Meine Freunde dieser sei gefeiert durch Gesang und Tanz

歌詞の背後にあるベートーフィン、シラーに共通する政治思想との関係; 当時の革命は、いきなり流血騒ぎが起こった訳ではなく、自由を願う(祝う)祝祭として始まり、その流れの中で自由(特権階級支配からの等)に向けて歌い発展していった。よく知られたメロディを基に、毎日のように“自由に寄せる歌”が生まれ、それは民衆の共有財産となり・・・ 注) Dieter Hildebrandt 著“Die Neunte”より

●革命は祝祭として始まり、自由に向かって歌い踊り、自由への解放を祝おう!